

マラナ・タ 主よ、来てください

今朝と一緒に聴きました使徒言行録 2 章 1 節から 13 節までは、五旬祭の日が来て一同の者たちが一つになって集まっていたときに起こされた神さまの御業についての証言です。起きた出来事を目撃した人たちがいて、その事件の驚きが記されています。14 節以下は、ペテロがこの出来事の意味を説き明かす箇所です。これが聖書に記される弟子による最初の説教になります。ペテロはもともとガリラヤ湖で漁を生業としていた人であり、教師ではありませんでしたが、このことを可能にしたのが正に、この日、天から与えられた神の霊である聖霊、弁護者とも、傍らに立つ者とも呼ばれる助け主、生きて働かれる神さまです。そして、この聖霊の派遣によって、弟子たちの群れは新しい段階へと進み、主に召し集められた群れである教会、今日のわたしたちにつながる教会が産声を上げたのです。

さて、その教会ですが、日本キリスト教団信仰告白では「教会は、主キリストの体にして、恵みにより召されたる者の集いなり」と告白されています。ここに今集められて礼拝を捧げているわたしたちは神さまの恵みにより召し出されているというのです。これはとても大切なところで、自分の意志よりも先にすべてのことを整えられる神の選びと招きに与って、すべてのことが整えられて神を礼拝する民が集められている。それはわたしたちを指して「キリストの体」であるとまで言われます。これはキリスト教の奥義ですね。教会とは、わたしたち、召し集められた群れを指す言葉なのです。そしてそれは徹頭徹尾、神さまの業、神さまのちょっといい方がきついかもしれませんが「召集令状」によるというものが、聖書の語っていることなのです。神の霊と恵みによる招き以外に、2 千年前の、時代も、

民族も違うイエスをキリストと告白して生きる道は開けないのです。つながらないものをつなげ、はなれているものを呼び寄せ、永遠と今を結びつける力が聖霊の働きです。

さて今週、わたくしは東海教区の婦人研修会の講師としての奉仕が入っていて、そのことは説教でもこのところ触れているように思いますがお題が「終わりへ向かう教会」というのです。これはさきほどの日本キリスト教団信仰告白の教会の項目で、教会の働きが5つありまして、①公の礼拝を守り、②福音を正しく宣べ伝え、③バプテスマと主の晩餐との聖礼典を執り行い、④愛の業に励みつつ、⑤主の再び来たりたもうを待ち望む。この⑤番目の「主の再び来たり給うを待ち望む」ことから、終りへ向かう教会という「主の再臨」の主題に取り組むことになったのです。そこでこの数ヶ月、わたしたちにとって教会とはどういう場所なのか、考えてみればこの2年あまりは新型コロナウイルス感染症対策で三密を避けるために集まることが社会的に制約されてきました。集まって礼拝することの意味を様々に考え、祈り、取り次ぐ言葉を求めてきました。他の宗教、お寺や神社と比較するとキリスト教会の特色がみえてきます。日本の教会の殆どは建物＝ハコしかないのですね。以前、会堂改修中に住吉神社のホールを借りて礼拝をしていた時も思いましたが、神社やお寺は、広い境内、参道を持っている。有名なところだと伊勢神宮など森の中にあります。そういう自然と一体化したような御神域、広い境内、あるいは門前町のようなものを有している。それだから逆に、真実に救いを求める者からは、宗教としてよりも、それは日本の風景と言われてしまうような部分もあるのだらうと思います。対して教会は本当に建物だけです。会堂だけ、しかも半田教会の場合は1904年に伝道が開始されてから各所を転々とし、最初的美普教会の講義所のあっ

た半田市荒古町も、戦前の会堂があったとされる場所も戦時中に建物強制疎開で取り壊され、戦後お座敷教会として自宅を開放された穂積圭吾・多美恵夫妻のお宅ももう残っていません。わたしたちの教会が建物＝ハコを手に入れたのは1964年、伝道開始から60年たってからのことです。それも教会堂として一から建てたものではなく、半田の女学校の講堂を競売で落とし、一部手を加えて移築したかたちでした。これはわたしたちの教会の語り継ぐべき大切な証ですが、ここにペンテコステの時に起きた出来事と同じ大切なポイントがある。教会とはやはり建物のことではないのです。あなたがたが教会そのものです、とペンテコステの出来事は宣言する。キリストを頭とする主に召し集められた者たちの有り様が教会を存在あらしめる。キリストが天にいまし、そこから、ご自身の霊を送ってくださる。そこに様々な賜物を与えられた老若男女、世代も性別も国籍も違う様々な人々が、ただキリスト・イエスを主と告白し、洗礼によってキリストに結ばれたことによってひとつの体となる。互いに愛し合い、仕え合い、賛美する群れとなって生きることによって、御言葉によって人格と人生と共同体を形作ることによって神の国のご支配を現してゆく。神社や仏閣のようにある領域や区画を必要とせず、場合によっては建物すら必要とせず、御本尊といった偶像をもたず、神の言葉と神の霊の宿る場所とされたわたしたち一人ひとりの集合体が教会であるという。神の言葉に聴き従い、主を賛美をし、応答する群れが教会であるという、この天と地をつないでいる結びつき、永遠と今のこの瞬間を結びつけている神の霊によるつながり、ふだんは与えられた持ち場でバラバラの時間を生きているわたしたちが、日曜の、この時間、ともに集まり、ひとつの人になるこの聖日礼拝の時に、キリストの臨在、神の御心が示される。そのよ

うな道筋ですね。わたしは礼拝開始数分前の、多く兄弟姉妹が集まりながら、しかし水を打ったように静かになるときがいちばん緊張します。神が、お語りになる場に聖霊を豊かに満たしてくださるよう祈っている。教会員の方々もそれぞれ1週間の歩みを持ち来たって、今日、神が御言葉を通して自分に何を語ろうとしておられるのか心を鎮め、一筋の心を与えられることを願っている。とくに不安や悲しみや悩みの中にあるとき、わたしたちは神のみ前に出て、導きを求めるものです。主よ、来てください、主よ、御言葉をください、主よ、憐れんでください、僕は聴いております。むろん、ここにいる一人ひとりの置かれている場は違い、担っている課題も世代によって異なるでしょう。しかし、神を喜ぶこと、救い主を褒め称えることを共になすことは、わたしたちの力の源です。2章の1節の五旬祭の日になって「一同がひとつになって集まっている」という表現が神の御業を慕って集まってきた人々、主イエスの約束に従って集まり、祈りと賛美をしていた人々の姿を浮かび上がらせます。使徒言行録を書いたのは福音書記者ルカですが、ルカによる福音書の最後は、次のように書いてあります。「メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。エルサレムから始めて、あなたたちはこれらのごことの証人となる。わたしは父が約束されたものをあなたがたに送る。高いところからの力に覆われるまでは、都に留まっていなさい。イエスは、そこから彼らをベタニアの辺りまで連れて行き、手をあげて祝福された。そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた。彼らはイエスを伏し拝み、大喜びでエルサレムに帰り、絶えず神殿の境内にいて、神を褒め称えていた」と言うのです。彼らが集まっていた場所がどこかを色々

な研究者が論じているのですが、ルカの記述から、神殿の広大な敷地の中にある場所ではなかったかと言われます。多くの人々が出来事を聞きつけて集まってくるのも神殿ならば頷けます。いずれにせよ大切なことは、選び出された群れがおり、主を呼び求め、そこに聖霊がくだる。神は求める者に聖霊をくださると約束されています。またパウロもコリントの信徒への手紙の最初のところに、こう書いています。「神の御心によって召されてキリスト・イエスの使徒となったパウロと兄弟ソステネから、キリストにある神の教会へ。すなわち、至るところでわたしたちの主イエス・キリストの名を呼び求めている全ての人と共に、キリスト・イエスによって聖なる者とされた人々、召されて聖なる者とされた人々へ」、これがパウロの教会理解です。救い主イエス様を呼び求めている人々であること、彼らは主ご自身によって召されて、聖なる者とされた人々、つまり聖霊を注がれて主に結ばれた人々であるという理解です。聖霊はそこに一人ひとりに留まり、そして彼らはそれぞれの地域の言葉で神の偉大な業を賛美し始めます。どのような地域の言葉が聞こえたか、記されています。パルティア、メディア、エラム、メソポタミア、ユダヤ、カッパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方、クレタ島にアラビア半島、これは実に広大な領域です。現在の小アジアから地中海東岸をへて黒海沿岸、イラン、イラク、そしてアラビア半島、エジプトから北アフリカ沿岸、そして地中海のクレタ島など島嶼部を含みます。それらの地域の言葉でひとつの御業が褒め称えられた。それはこのすぐ後に、ペテロが説き明かす内容ですが、神がイエス・キリストにおいて、わたしたちを救われた。十字架と復活の御業によって罪と死の支配から、わたしたちを贖い取ってくださった。もはや死は、死で

はない。最後の出来事ではなく、キリストの命のうちに飲まれてしまい、その棘は力を失っている。偉大なるかな、神。主はいまも生きて働いておられる。聖霊が降されたことによって、神が約束されたことは今後も果たされ続けることが明らかとなった。わたしは時々、教会をオーケストラの演奏に譬えますが、まさに集められた人々が様々な故郷の言葉で神を賛美したというのは、ある人はフルートであったり、トランペットであったり、ヴァイオリンだったり、チェロだったり、わたしたちに個性が違った賜物が与えられているがゆえに音色もさまざま、しかし、演奏する曲は神の偉大な御業の賛美です。頭（かしら）であるキリストに従う歩みによって演奏されてゆく愛の調べが教会の、賜物は違うが神を喜ぶことにおいて一致する働きとなります。神は、ペンテコステの日に、わたしたち人間を通して神の国の働きを展開されることを明らかにされたのです。神はほかにどんな手段をお取りになることが出来たにもかかわらず、わたしを用いて、召し集められた者たちを用いて働かれる。わたしたち一人ひとりが神に喜ばれる器なのです。老若男女、能力も賜物も違いますが、それでよい。違った歩幅で同じ約束に生かされ、一緒に同じ方向を目指して歩いてゆく。御国の消息に生かされ、喜ぶ歩みに、神のご計画が現されることを信じて、主の御名を崇め、聖霊の風に送られてこの年の歩みを進めてゆきます。

お祈りいたします。